

姫田忠義さんとの対話(覚書) (1) 姫田さんとの対話より 2009.11.7

京大博物館で開催される「国際映像シンポ」のプレ・イベントにかかわって、京大博物館で2回、姫田さんと会う機会があった。

やまだ:北海道で開催された質的心理学会で、アイヌの結城幸司さんのライフストーリーを聴く機会がありました。先日、姫田さんに教わった、アイヌのことは「ウェペケレ(みんなで清らかになる)」の意味を語ったら、みんなが感動してくれました。結城さんからは、ウェペケレから「火を囲むイメージ」が浮かぶということばが返ってきて、イメージがさらにふくらみました。

姫田:「アペブチカムイ」(アペ(火)ブチ(おばあさん)カムイ(神))ということばもあります。火はおばあさんが宿る神さま。アイヌの人たちは、火をあがめるが屋外でむやみに燃やしたりはしません。イヨマンテ(熊送り)の祭りが、外で焚く盛大な火祭りのように思われているのは、まったくの誤解です。外で火を焚くのは、むやみに獣を恐れさせますから。火は日常生活の基本をささえるものです。

やまだ:キャンプファイアーなどの火とは違うものですね。私たちが「おくどさん」と敬称で呼んできたものに近いのでしょうか？

姫田:そう。

やまだ:先日、京都の愛宕山に登りました。愛宕神社は、火の神様ですね。毎月山に登って「しきみの木」をもらい、その葉を毎朝火をたくときに1枚ずつくどに入れて、安全を祈願したのがはじまりとか…。その祈りの感覚に近いものがありますか？

姫田:そう、そうです。

姫田忠義さんとの対話(覚書) (2) 姫田さんの映画と講演より 考えたこと

2009.11.7/2009.11.8

目に見えないものを見る

耳に聞こえないものを聞く

越後奥三面の村との出会い。単にダムで沈むから記録しておく必要があるというだけではなく、その村のもつ歴史の深さとの出会い。結婚して分家するとき、3つの財産権があると聞いた。オソ場(獣をしかける場所の権利)、ドッ場(川魚をしかける場所の権利)、スゲ場(スゲなどの草を採る場所の権利)。これを聞いて、稲作以前の縄文の生活文化を今に伝えている集落ではないかと思った。

→ひとつの集落に住み着いて10年がかりで記録する。生身の人間が生身の人間に出会うことが一番大切。概念で取捨選択しないで、生身に近い現象を人に映像で伝える。「村がなくなる」「学校が閉校する」ときの村人の何ともことばにできない絶句した表情、家が壊されていくときの立ちつくす姿をクローズ・アップでひとりひとりとらえる。(匿名ではなく、名をもつひとりの生きた人間として個別の記録に徹する)。生身をサポートするために、あらゆる電子機器を駆使する。

→現在の姿を超える時空の広がりへの洞察。縄文時代やほかの生活文化とのむすびつきを見る視点。基層文化。丸木船づくりの再現→鉄器以前のくさび型の木の削り方の発見。行政区の線引きにとらわれない、山、川、海のむすびつき。稲作農耕と定住だけではなく、移動や狩猟の生活からものを見る視点。

→スイスの山で牧畜に生きる人々に映画を見せたら、「なつかしい」ということばが返ってきた。内容はちがうけれど、自分たちが子どものころには、四季折々に自然とむすびついた生活行事があったのに消えてしまったと言われた。

→映像表現としての伝え方、映像ナラティブのつくりかたの技法の一般性。「山に生きる人々」映画冒頭で描かれた、いろりにかかるやかんの湯気、のんびり眠る猫の表情、90歳を超えた老婆の表情と語り。(佐藤監督の「阿賀に生きる」に伝えられている)

→「仮想地球」のデータ・ベースとの議論から。地域研究におけるフィールドワークとは何か。アフリカのフィールドワーカー。たこつぼ的にフィールドに入る。(Oさんの話)「一点突破全面展開」。自分が深くかかわってきたフィールドの人たちを「データ」と呼びたくない。

→11月7日映画 短編四本を見る。「奥三面のドゥつくり(15分)」「奥三面の熊オソ(15分)」「山人の丸木舟(32分)」「ぜんまい小屋のくらし(25分)」

技術中心にテーマを限定し、丁寧にほりさげる。現在すでに伝承が途絶えてしまったものも、再現して重要な生活文化を伝える。

→11月8日映画 長編二本を見る。「越後奥三面一山に生かされた日々(145分)」

生活を四季の変化の流れにあわせて、全体的な記録として淡々と編集する。

「越後奥三面 第二部ーふるさは消えたか(152分)」

人々の表情や姫田さん自身のナレーションによって「この大事な村落を失う」無念さを伝える。村落がなくなった後、縄文の遺跡が発掘されたこと、その後の人々の暮らしなど。

→11月8日の「ふるさは消えたか」(京大博物館の映画観客は、わずかOさんと二人であった)を見たあと、Oさんとの対話。

Oさんの疑問。ここまでやるか？訴えたいこと「メッセージ性」「感情」がおもてに出すぎているのではないか。繰り返しが多すぎて冗長になっているのではないか。あそこまで、ひとりひとりの表情や涙などをクローズアップして執拗に追う必要があるのだろうか。フィールドに入れ込みすぎ、運動体としての活動になってしまっている。

(もう一方で「仮想地球」プロジェクトに疑問をもつのは、深くフィールドを理解していないで、表面的にデータベースにしようとすること。))

「姫田さんの映画を実際に見ないで、みんな、まるで見なくてもわかったかのように討論している。映画を実際に見に来たのは、ボクとやまだ先生だけじゃないですか。」

私の疑問。山村の生活は、よいことばかりでしゃなかったはず。引っ越し後の生活のほうがよかったという部分もある。村落の人生や生活の忠実なドキュメントとしての記録と、都会人や近代人が古い民俗によせるノスタルジー的な想いには、ギャップや矛盾があるはずだが、その葛藤には極力ふれられなくて、きれいごとになりすぎていたかも。

私自身は、「山人の丸木舟」がいちばんよかったと思った。「丸木舟」という、山と川をむすぶ乗り物つくりのプロセスをていねいに技法中心に描くことで、山の木々や川とのかかわり、冬の雪の利用、縄文から受け継がれた技術と知恵、世代間の伝承、個人と村人集団との関係、山に感謝する祈りなど、すべての核となるものが、ひとつの事例のなかに深く広く含まれていた。

姫田忠義さんとの対話(覚書) (3) 姫田さんのライフストーリー

姫田忠義(ひめの・ただよし)さん(1928年9月10日 - 現在 81歳) (姫田さんのライフストーリー 一編集 やまだようこ)

兵庫県神戸市生まれ、ドキュメンタリー映画監督、映像民俗学者。民族文化映像研究所(民映研)所長。

父はガス会社の工員。兄や姉は高等小学校卒。国鉄勤務の兄の援助で、1941年に兵庫県立第四中学校進学。1944年に志願し予科練入隊。飛行機不足で一度も飛行機に乗ることはなかった。1945年、特攻隊に志願。人間魚雷の突撃候補となるが、そのまま敗戦を迎える。

戦後、沖仲仕をしながら、旧制神戸経済専門学校に通学。卒業論文は人間の価値を哲学的に考える「価値論」をテーマにしたが、書きあげることができず、教授の温情で卒業。住友金属工業に入社し、尼崎工場の労務課に配属。社内の演劇活動に誘われ、演劇に熱中する。

入社5年で退社。1954年(約26歳)に上京、演出家志望。上京半年後で、「日本読書新聞」に掲載されていた民俗学者宮本常一の記事に興味を抱き、日本常民文化研究所の宮本を訪ねて、その人間的魅力に圧倒されて師事する。様々な職業につきながら、劇団活動を続けるが、その人間関係に嫌気がさし、3年で退団。

1958年(約30歳)には、宮本から教えられた対馬にわたり、ほとんど資金がないまま、15日間にわたって村々を訪ね歩く。この際に出会った60歳の老人から、父親の借金を一生をかけてかえした話をされ、「わしは、あんたにこの話をするためにいままで生きてきたようなものだ」と言われて衝撃を受け、以降の活動の原点となる。

1961年にカメラマンの伊藤碩男(のちに民映研の創立に参加)と、再度、対馬を訪れ撮影。1965年から1966年に製作された、宮本常一監修のテレビドキュメンタリー「日本の詩情」の取材・脚本・構成担当。日本各地の村々を取材して周り、日本列島の多様性に目覚める。宮本主催の雑誌「あるくみるきく」の取材などで、山村文化に注目して日本中の山々をめぐり、また沖縄やアイヌの人々などを訪ね歩く。

1968年(約40歳)にはアイヌ文化研究者の萱野茂と出会い、アイヌの深い精神文化を教えられて感銘を受ける。その後、萱野の著書執筆への協力活動や、萱野のアイヌ文化復興活動を映像におさめるなど、生涯にわたる交流を続ける。

1968年～1970年には初の映画監督作品として、宮崎県の山村での、イノシシの首を神にささげる祭りを記録した「山に生きるまつり」を製作。この際から、カメラの伊藤碩男とともに、「製作担当」として小泉修吉(やはり、のちに民映研の創立に参加)が同行。

以降、日本各地に残る貴重な民俗文化(自然に依拠した人間の精神文化である「基層文化」)を映像に残し、100本を超える作品を制作。主な作品に、「アイヌの結婚式」(1971年)「イヨマンテー熊送り」(1977年)「椿山ー焼畑に生きる」(1977年)「越後奥三面ー山に生かされた日々」(1984年)「越後奥三面第2部ーふるさととは消えたか」(1995年)など。国内外で数々の賞を受賞し、海外でも高く評価されている。

また、撮影時にはすでに「行われなくなっていた」行事や技術等については、かつての体験者に依頼し、復元してもらったものを映像化した作品もある。その作業をきっかけに、途絶えていた伝統が復活した例も多い。

1975年(約46歳)、フランスの人類学者ジャック・ルフィエが「アイヌ文化研究」のため来日、様々な日本の伝統文化の魅力について語り、意気投合。1977年から姫田もフランスに渡り、バスク地方、カタロニア地方、オキシタニア地方などの南フランスの固有文化について、コレージュ・ド・フランス形態人類学研究所と、共同研究を行った。1975年から、山口県光市での村崎義正らの「猿まわし復興」活動にも関わり、その調教の記録を「周防猿まわし」として映像化。

1976年(約47歳)には「民族文化映像研究所」設立。1981年からは民族文化映像研究所内で、定期上映する活動「アチック・フォーラム」を開始。

1980年(約52歳)には、ダム計画で消え行く可能性があった、新潟県岩船郡朝日村の「マダギの里」として知られた「奥三面(おくみおもて)」集落を訪問。狩猟、焼畑、川漁、山菜・木の実採集などの日本人の古くからの営みのほとんどが行われていることに感動し、翌年から村の暮らしを詳しく記録して映像化した(なお、「奥三面ダム」建設のため、1985年秋に村は閉村。2000年10月に、集落の跡地は水面下に消えた)。

私たちに「民俗映画」を撮るという意識はなかった。「人はどう生きてきたか」ただそのことへの関心。山には山の系譜があり、海には海の系譜がある。それを訪ねて歩き、映像で記録しよう。すべては、そこからはじまった。(HPのことば)

1961年以來、日本の基層文化を映像で記録・研究する事を目指して出発した民間の研究所です。北緯20度から北緯45度に到る、約3000キロメートルにも及ぶ長大な「日本列島」。そこには60万年を超える長い「歴史時間」の中で培われた「自然との深い対応と共生」の人間生活・文化があります。その「自然との深い対応と共生」の在りようを私たちは「基層文化」と捉え、刻々の今を生きる人々(特に庶民)の生活行為を見つめることによって、明らかにしようとしてきました。そしてその作業は、日本にとどまらず、フランスなど世界の諸民族の地へも広がりつつあります。
